

Contemporary

British and American

Writers II

現代英米小説の担い手たち
II

フェニックスの会編

弓書房

現代英米小説の担い手たち II

Contemporary British and
American Writers II

フェニックスの会編

弓書房

現代英米小説の担い手たち II
Contemporary British and American Writers II

定価2,500円

昭和62年5月20日 初版発行

編著者 フェニックスの会

発行者 寺内由美子

発行所 弓書房

発売所 鷹書房

東京都文京区後楽2-4-1 (〒112)

電話東京03-815-5523 振替東京0-22523

印刷 萩原印刷 製本 関川製本

INBN4-8034-0314-7 C3098 Y2500E

展 望

——イギリス——

清水 重夫

私たちがこの読書会を始めてから五年が経つ。ジェイムズ・ジョイス、D・H・ロレンス、E・M・フォースター、バージニア・ウルフ、E・ポウ、ウィリアム・フォークナー、リチャード・ライト等々が、メンバーの興味の基盤であった。そしてその前に、鈴木幸夫先生のゼミで、ジョイスかウルフの洗礼を受けたことが共通の経験になっている。今でもマーテロ・タワールの上のバック・マリガンとステイブ・ディダラスとの会話や、ネコを相手に奥さんの朝食の用意をするレオポルド・ブルームの姿が鮮烈に心に浮んでくる。ともかく一度に一ページの半分も読みこなせないほど強烈なものだった。

日本の英米文学界が従来やってきたことは、英米文学の作品を読み、本国の批評家、学者達の論を参考にして、やっと自分の考えをまとめるという域を出ていない。そして、翻訳を含めて、「向う」のものを紹介することにやはり主眼が置かれている。飛行機等の交通機関が発達した今日、アメリカやヨーロッパは一日以内で行けるほど「近く」なったという見方が一般的

である。しかし、逆に言えば、ジェット機に乗っても十六時間以上もかかって、やっと到着するロンドンほそれだけ遠いとも言える。日本が英米と地理的に遠いということは、精神的にはもっと遠く隔っていることを意味する。国と国との関係はサミットや政治家に委せておくにしても、そのギャップにどう対処するかが、私たちの課題の一つである。結論的に言えば、私たちは、日本との様々な相違を意識しながらも、英米の小説についてできる限りきちんとした把握をし、同時に文学のあり方を考えてゆくつもりである。

私たちの興味の基盤は大体今世紀前半の英米小説に限られているが、第一次、第二次の世界大戦を経て、第三次の危険性も考えられ得る今日、現代の様々な問題に取り組む作品を読んでゆく興味と必要性を感じている。そこで一九六〇年以降に世に出た作家達の比較的新しい作品を中心にこれまで読んできた。第二号を出すにあたって、一応の展望をしてみようと思う。

現代の小説について論じる時、私たちはやはり、ジェームズ・ジョイス、そして一九二二年に出版された『ユリシーズ』から始めなければならない。この作品の特徴としては、各挿話がそれぞれ違った文体を持っていること、従って語り手が挿話によって異っていること、パロディや語呂合わせといった笑いの要素があること、筋と呼べるほどの筋立てがないこと、それを補う意味でホメロスの作品が下敷きになっているらしいこと等があげられる。また特に第十四

挿話「太陽の牛」には以上の特徴がよくあらわれているが、ジョイスはその上、英語文体史の総まくりまでやっている。それまでの英文学史の伝統を彼が意識したというだけではなく、産科医院での学生達の話を文学史に顕著な作家達の文体のパロディにすることによって、作家としての自分の存在を明らかにしたわけだ。

以上あげた特徴は、そのままモダニズムと呼ばれる文学の特色となっている。言葉や文体に対する著しい関心というモダニズムの特徴の裏には、第一次世界大戦の影響がある。西欧社会は、神の喪失と旧社会秩序の崩壊を経験し、その結果、以前とは異なった世界観、人間観があらわれた。その人間を描くための新しい表現が必要になった、というのは一応の文学史的解釈であり、これはニーチェやフロイト等の出現と影響を考えあわせると納得のできる考えである。しかし、『ユリシーズ』の文体のパノラマを目の前に置いてみると、裏がえしに考えて、言葉や文体への関心が、言葉遊びをはじめ様々な工夫を生んで、それによってできた作品が新しい世界観、人間観を生むという効果もあったのではないかと考えられる。

「文学は現実を映す鏡である」という従来の考えは、『ユリシーズ』にも生きていて、舞台を現実のダブリンに置いたことで達成されているけれども、各挿話の文体はこのリアリティ感覚を超えたものになっている。従って、従来の主人公やプロットの設定、時間的統一性等々の考え方は破壊してしまった作品とも言える。

ジョイスは更にこれをおしすすめて、『フィネガンズ・ウェイク』では言語そのものまでも破壊する方向に行ってしまった。

イギリスではその後、オーウェルやグレアム・グリーン等のいろいろな傾向の作家の台頭があったけれども、一九六〇年代以降の作家の多くは、ジョイスの求めたものを彼の作品によって経験し、彼を無視することはできなくなっている。彼らはポスト・モダニストと名づけられている。名前の通り、言葉や文体への関心というモダニストの特徴は持ちながら、更にその上に、第二次世界大戦を経験したことが重要な特色となっている。ナチズムのもたらした全体主義の恐怖、そして原水爆の使用によって人類の滅亡ということが半分現実になるような経験をした彼らは、人間存在の無意味さ、虚無という考えを取り扱わなくてはいられなくなっている。私たちの関心の多くが、こういうポスト・モダニスト達の作品や動向に向けられていき、作品を読みすすんでゆくに従って、ポスト・モダニスト達の経験しているものは、単にイギリス文学のみとか、アメリカ文学のみに限ったことではなく、両国の文学に共通の問題として扱うべきだと考えるようになった。

これをふまえながら、便宜的に一応私たちの読んできたイギリスの作家たちについて概観を試みたい。矛盾する言い方であるが、やはり、アメリカの作家と比較して、ジェイン・オースティンやアーノルド・ベネット等の伝統が色濃く残っていることを前提にしよう。

先ず注目されるのはジョン・ファウルズである。先年映画にもなった『フランス軍中尉の女』では伝統的な文体を使いながら、各章の冒頭にはヴィクトリア朝時代のジャーナリズムの文体を引用して、作品全体に時間的な重層性をもたらし、更に終り方では複数の方法を提示して、後は読者にまかせるという風に工夫が見られる。そして『ダニエル・マーティン』では、

時を全て現在に集める試み、複数の語り手、時を前後する語り手、人称や時制の切替え、そしてバラの薔、炎を始め、鏡や無垢、破壊等、無数のイメージの持つ屈折した意味の広がり
(兼坂)

を持つ作品に仕上げ、更に

テキストの「複数の茎」を「読む快楽」は、テキストの「複数の茎」を「縦」になぞっていくことだけにあるのではなく、「複数の茎」にからまるようにしてその瞬間瞬間に出現する「横枝」に強く引かれながら「読む」ことにもあるのだ(吉川)

という論評を可能にする。諸者に、作家と一緒に「読む」という行為を意識させるとすれば、

正しくポスト・モダニストの作品である。

このことはアンソニー・バージェスについても言える。基本的には保守的で、カソリックである彼は、逆にジョイスの研究者としても知られている。先号で扱った『時計じかけのオレンジ』は、先ず「ナッドサット言葉」という架空の造語を使うことからはじめて、極めて文体を意識しているのは、従って当然なことだが、彼は更に、機械じかけの人間性をテーマとして、ピンチョンに通じるような終末感をただよわせる世界を描いてゆく。これを寓話として捉える可能性もある。

こうしてみると、やはり先号でエリカ・ジョンズの『飛ぶのが怖い』で論者が述べているように、作品が様々なレベルで読めるというより、そう読むことを可能にするような描き方をするのが、ポスト・モダニストの特徴といえよう。

アンジェラ・カーターについてもこのことは言える。『新イブのパッション』は、文体としてSF仕立ての近未来の不思議な世界が描かれながら、語り手に工夫があったり、ファウルズのようにオープン・エンディングを持つ作品である。彼女は他の作品でもパロディや文体の遊びを試みている。

カーターについて述べる時には、フェミニズムについて言及しないわけにはゆかない。

「カーターのフェミニズム」という風に表わされるように、作品の中に表現されたフェミニ

ズムについてなかなか一般化することはむずかしい。私たちは先号でドリス・レスリングの『たそがれの夏』、エリカ・ジョングの『飛ぶのが怖い』を読み、今号ではアリス・ウォーカーの『カラー・パープル』を読んでいる。レスリングは伝統的文体で中年の女性の自立を扱い、ジョングは、彼女自身当時のウーマン・リブの旗手にたてまつられて、奔放な生き方をする女性像を描き、ウォーカーは黒人の女性の自立の目覚めを追っている。ウォーカーの作品は全編主人公が神に送る書簡という、古くて新しい文体と、黒人独特の言いまわしが特徴となっている。アメリカの黒人女性文学については、黒人であることと、女性であるという二重の条件があるために、ポスト・モダニズムの流れについても、フェミニズムについても、一步距離を置きながらも着実な歩みを始めているようである。フェミニズム文学こそが、現実の女性の様々な問題と創作との間に緊密な関係を持てる分野だと主張する評論家もいるくらいで、私たちもこれから更に読み進んでゆかなければならない分野だと考えているが、さしあたり、次の引用でしめくりたい。

それは例えば、蛇がアダムではなくイブに話しかけたのは、イブがアダムより低劣だったからではなく、知恵の動物である蛇が対等の相手として選んだからだ、と主張するようである種のフェミニズムではなく、つまり、男を女の敵として位置づけ、その図式の中で女の復権

を意図しようとする素朴なフェミニズムではなく、世界認識の手段として、両性関係に焦点を絞ると視野に入ってくる種々相を、安易な普遍化を避けながら描こうとしたのである

（清藤）

さて、私たちは、イギリス文学の中では、伝統的な描き方をする作家にも無関心ではいられなかった。その中でアラン・シリトーについては、モダニズムとは別のアプローチが可能であったが、ウィリアム・ゴールドディングについては、やはり、ポスト・モダニストの名を冠せざるを得なかった。一応は伝統的な描き方をしながらも、推理小説仕立ての『航海の儀式』は、文体の工夫と相まって、真実に到る道のりをむずかしくしている。

イギリス文学全体として見れば、オーウェル、グレアム・グリーン、マーガレット・ドラブルの伝統もあり、現代の作家はすべてポスト・モダニストと呼ぶのはいささか性急である。やはり様々な作家が書きたいように書き、それを受け入れる読者層もあるということになるうか。私たちはファウルズ、バージェス、カーター、そして新しいポスト・モダニストを追いつつ、この行方を追ってゆくことになるだろう。文学理論との関わりについて言えば、一定の正しい理論があるとは考えない。各々が、フェミニズムにしろ、構造主義にしろ、その作品にとってふさわしい方法を模索していると述べて終りにしたい。

——アメリカ——

堀 邦維

一九六〇年代以降のアメリカ小説のある特徴的な作品群あるいは作家群に対して「ポストモダニズム」なる呼称が多用されるようになって久しい。この用語の明確な定義づけにはまだ時間を要するであろうが、その名の通りモダニズム以後、ということであれば、少なくとも、二〇世紀初頭に起こったモダニズムが意味するものを踏まえた上での呼び名であろう。ポストモダニストと称される作家の一人ジョン・バーズは、ポストモダニズム文学とは、「ある点ではモダニズムのプログラムの延長であり、またある点ではモダニズムに対する反動である」という一部の批評家たちの見方を是認する。

モダニズムとポストモダニズムに共通するのは、その根幹にある強い方法意識と、そこから生まれる前衛的手法にある。しかし、前衛的であるのは、あくまでも同時代の他の作品群との相対的なもので、現在一般にはポストモダニズムのカテゴリーに含められないような作家にしても、方法や意識の面で彼らに先行したモダニストたちの遺産を継承していないわけではなく、時代の位相を前にずらせば、十分に前衛的であるはずだ。

いずれにしろ批評のカテゴリーは、相対的、暫定的なものに過ぎない。個々の作品はつねにそれに優先されるべきものである。しかし、一方で個々の作家は、彼を取りまく社会と、厳然

として存在する前時代からの文学史的コンテクストを無視するわけにはいかない。そして、その中で、ある種の選択を常に迫られている。

一九五〇年以降のアメリカ小説を総観した『言語の都市』（1971）の中で、トニー・タナーは次のような言い方をしている。

社会的空間と個人の内的空間の間に、作家が彼の自由と形式を求める第三の領域あるいは仲介的領域がある。それはもちろん言語空間である。

これは、ロラン・バルトの『零度のエクリチュール』（1954）の中での立言、「エクリチュールは創造と社会との間の関係である」を想起させる。トニー・タナーの言う作家の「自由」は、この「関係」のあり方すなわち「エクリチュール」を選択する自由に他ならない。バルトは言う、

……この自由は歴史のさまざまな時期に応じて異なった限界をもっている。文学形式の超時代的な一種の兵器庫からエクリチュールを選ぶことは作家には許されない。歴史と伝統の圧力のもとに、一定の作家の可能なエクリチュールはうちたてられる。エクリチュールの歴史

というものが存在するわけだ。

一方、エクリチュールが創造と社会との関係であれば、エクリチュールの歴史は与件としての社会の歴史的变化にも対応する。バルトは、一九世紀中葉における近代資本主義の成立によって、フランスの単一な古典的エクリチュールが崩壊し、多様化の傾向を見せ始めたという。この時期を境にブルジョワ・イデオロギーが崩壊し「作家はその意識が、もはや自分のおかれた条件を正確にカバーできないので、あいまいさの餌食」となったからだ。

しかし、アメリカ文学の歴史的発展過程をバルトの論ずるフランスのそれと全く同一に考えるわけにはいかない。そもそもアメリカ社会の歴史がヨーロッパのそれとはかなり異なった経過をたどっている上に、「単一な古典的エクリチュール」なるものが存在したかも怪しい。アメリカには「単一な古典的エクリチュール」を形成すべき社会の慣習や規則、言いかえれば、個人の感覚や思考を一定の方向にむかわせる一連のパターンが、ヨーロッパに較べると最初から極めて希薄であった。すなわちアメリカ作家は最初から多かれ少なかれ「あいまいさの餌食」であったということだ。アメリカ文学が、ホイットマンやメルヴィルの時代から、アイデンティティの問題に深く関わっていたのは、このことと無縁ではない。エリクソンの言うように、満足しうるアイデンティティの達成は、個人を取りまく確固たる社会を前提としてはじめて可

能なのである。とは言え、一九世紀までは、自己の輪郭を放擲するに価する非人格的、あるいは神秘的な自然に対する信頼があった。この信頼が一九世紀のアメリカ文学全体を支えたのであり、またハックルベリーフィンの無垢の神話を保証したのである。

むしろ、アメリカ小説におけるエクリチュールの多様化が加速的に進展するのは、第二次大戦前後のことである。それは急速な資本主義化とそれともなう都市化現象、ユダヤ人や黒人などの少数派グループの社会的文化的台頭、モンロー主義の崩壊による社会と文化両面における国際化などがもたらしたワスプ中心の伝統的メンタリティの崩壊と価値観の多様化を背景とする。特に文学面では、戦前からの西欧モダニズムの導入と受容、南部文芸復興、ユダヤ系作家や黒人作家の文壇への進出などが起こり、多様化を促進した。だが一方、戦後アメリカ社会は、アーヴィング・ハウが指摘するように、加速的な工業化と組織化の進展とマス・メディアの発達のもとに、これまでに類をみない巨大な大衆社会 (mass society) を形成するに至る。人間が、大量生産される製品と同様に一樣化され、社会における個々の自我は卑小なものとなり、あらゆる面での非人間化の現象が生じる。こうした文学的社会的状況の中で、現代アメリカ作家は、自己の「エクリチュール」ないしは「言語空間」を選択し確保しなければならない。ソール・ペローは、六〇年代初頭に書いたあるエッセイの中で、アメリカ小説は二つの型を保持しており、その一つを具体的事実を重視する「事実の小説」(the novels of facts)、もう

一つのそれをヘンリー・ジェイムズの伝統をひく「感性の小説」(the novels of sensibility)とした。ペローは、この両極の立場の一方にだけ偏する限り、現代社会の人間の状況を描くには不十分であるとして、自らの文学的営為の中で、両者の統合を目ざしてきた。その結果、『ハーツォグ』(1964)では書簡体の彼独自の使用を試み、さらに『学生部長の十二月』(1982)ではジャーナリズムの文体を混用した。これらの方法の選択の過程には、ペローがつねに日頃愛読するジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』の影響をみることができるといえる。

このペローの例のように現代のアメリカ作家は、多かれ少なかれ、西欧モダニズムを含めた先行する文学の伝統と、自分を取りまく社会状況との間で、折り合いをつけないならぬ。その折り合いのつけ方に多様性が生まれる。

前述のように、戦後アメリカ小説の多様性は、一つにはアメリカ社会の多民族性に、その原因がもためられる。だが、五〇年代、六〇年代にかけて隆盛を極めた「ユダヤ系文学」及び「黒人文学」は、当時とくらべると各々のジャンルとしての有効性と響きを失ないつつある。彼らの文学の最初の繁栄は、自らの民族の固有性が同時に普遍性を持ち得るといふ幸運な文学的社会的状況の中でもたらされた。だがかつて、彼らの専売特許であった「疎外」状況が自明のものとなり、「疎外」という概念そのものが風化していこうとする現在、彼らの文学は新たな展開を強いられている。ユダヤ系作家及び黒人作家たちは、民族の固有性をひきずりながら

も、一方でその殻を破って、現代文学の動向にも呼応する多様な局面を切り拓きつつある。

ペローと同様のユダヤ系作家でみれば、フィリップ・ロスは、『ポートノイの不满』(1969)で、ユダヤ性そのものをテーマにしているとはいえ、手法上の実験として自意識の深層から発する「わめき」にも似た語りを実現した。さらに、『乳房になった男』(1972)では、シュールレアリスムの手法を、『素晴らしきアメリカ野球』(1973)では、パロディと奔放な諷刺でアメリカ社会を皮肉った寓意小説を試みている。また、ジョセフ・ヘラーやスタンリー・エルキンらは比喩と寓意に満ちたブラックユーモアの世界を現出する。これに反して、イディッシュ語で書くI・B・シンガーやユダヤ的題材を基本にした今は亡きバーナード・マラマッドは、民族性に固執し続けるが、シンガーはその民話調の語り口、マラマッドは象徴的技法を駆使した作風で現代アメリカ小説に異彩を放っている。また、ノーマン・メイラーやE・L・ドクトロウらは極端な事実性への傾斜を示して「ニュー・ジャーナリズム」というジャンルを形成する。

黒人文学も事情は同じである。民族主義の高まりの中での正面きった抗議と告発の文学は影を潜め、手法的実験を行なう作家が活躍しはじめる。たとえばコラージュの技法を使うイシユ・マイル・リード、超現実主義的な作風を持つウィリアム・M・ケリーなどはその顕著な例である。だが一方、アーサー・ヘイリーの『ルーツ』(1976)にみられるように、黒人であること